

119 MRIによる卵巣腫瘍の画像診断

近畿大

武田玲子, 植苗茂樹, 奥村嘉英, 井上芳樹,
刈 勲, 野田起一郎

【目的】MRIによる卵巣腫瘍の良悪性, さらには, 組織型診断の可能性について検討する。

【方法】卵巣腫瘍 25例(漿液性嚢胞腺腫 5例, ムチン性嚢胞腺腫 3例, タール嚢胞 5例, 皮様嚢腫 7例, 卵巣癌 6例(漿液性嚢胞腺癌 1例, ムチン性嚢胞腺癌 1例, 類内膜腺癌 2例, 明細胞癌 2例))について, 術前のMRI所見と, 開腹時所見, 病理組織学所見との関連について, 溯及的に検討した。MRI装置は, 静磁場 0.5テスラ超伝導装置(島津)で, T_1 強調画像としてスピネコー法($SE: TR=510\text{ msec}, TE=35\text{ msec}$), プロトン密度強調画像としてマルチエコー法($ME: TR=2000\text{ msec}, TE=35\text{ msec}, 90\text{ msec}$)を用いて, 腫瘍内容の縦緩和時間 T_1 , 横緩和時間 T_2 を計算した。

【成績】漿液性嚢胞腺腫の T_1 は, 2470~3200 msec, 平均 2800 msecであった。 T_2 は 120~650 msecの間で平均 300 msecだった。ムチン性腺腫では T_1 は, 3170~4130 msec, 平均 3860 msecであった。 T_2 は 210~1430 msecの間で平均 640 msecだった。タール嚢胞の画像は均質な内容液と, 時に膜の肥厚を示し, T_1 350~4100 msecと多様であったが, T_2 は 40~180 msecの間で存在し, 平均 100 msecであった。皮様嚢腫は, T_1 180~370 msecの間で存在し平均 290 msecであった。 T_2 は 60~90 msecの間で, 平均 68 msecだった。悪性腫瘍では, 一般に画像上腫瘍内部は不均一であった。ムチン性嚢胞腺癌では, CT上は充実部として表現される病巣が, 小嚢胞の集合である所見が明らかとなり, 診断に有用であった。

【結論】MRIによる卵巣腫瘍の画像診断は, 従来なし得なかった腫瘍の組織型についての情報を提供することが可能であると思われた。

120 下垂体性標準品を用いた新しい血中 LH, FSHの IRMA測定系の臨床的検討

徳島大

苛原 稔, 安井敏之, 青野敏博

【目的】最近, LH, FSHに対するモノクローナル抗体と, 測定原理として immunoradiometric assay (IRMA)系を用い, さらに従来からの尿由来の標準品(2nd IRP-HMG)に代えて下垂体性標準品(LH:1st IRP-LH, FSH:2nd IRP-HPG)を採用した新しい血中 LH, FSH測定系(SPAC-S LH, FSH)が開発され, すでに広く使用が開始されているので, その測定系の臨床的意義を明らかにするために検討を行った。

【方法】両測定系について, 全国の多施設の協力を得て, 各年齢の正常男女, 妊婦, 各種内分泌疾患患者等の約3000検体につき, 従来の二抗体法測定系と比較しながら検討した。【成績】両測定系の測定値は, 従来の二抗体法による測定値と良好な相関関係(LH: $r=0.925$, FSH: $r=0.965$)を示し, その値はホルモン標準品の変更により, 二抗体法の値に対しLH系で26.5%, FSH系で71.7%に低下する。正常成人女性卵胞期の測定平均値($M \pm SD$)はLHで3.2 (1.4~7.4) mIU/ml, FSHで5.5 (3.0~10.2) mIU/mlであった。一方, 正常妊婦のLH・FSH測定値は各妊娠期とも0.6 mIU/ml以下と低値を示し, モノクローナル抗体を使用しているため, hCGとの交差反応なしに測定が可能であった。さらに, 各種内分泌疾患患者の測定値は従来の測定系と同様のパターンを示したが, 多嚢胞性卵巣症候群での平均LH/FSH比は1.43と従来の測定系の値の2.95と比較し半減していた。【結論】両測定系は, 新しくWHOが推奨している下垂体性標準品を採用したことにより, 国際的に測定値の比較が容易になるなど有用性が高く, 今後本邦での中心的な測定法となると考えられるが, 正常値などの変更があるので, この点の周知徹底が必要と考えられる。